

巻頭言

終戦の日に思う

玉木 正男

1956年、約40年の昔である。

米国 M.大学病院放射線科を視察。助教授 Dr. F.が懇切な説明をされたが、話がはずみ「夕食は宅で」ということになった。外出中の夫人に連絡がつかず、前ぶれなしにお宅を訪ねることになった。F.夫人は全く思いやりのあるお人柄で、狭小な敗戦国からの客人を迎えて「利用されぬままの広大な土地を見て不愉快に思わぬか」との会話を今も思い出す。世界各国の経済、富は、当時は農産物、石油を含む鉱産物など土地の生産に大きく依存していたのであった。当時、現在の精密科学技術の大きな成果を予想した者があったであろうか。その基礎になったものは言うまでもなく教育の普及であると言っても、教師の独り言とは言えないであろう。

(1997年8月15日)

(大阪市立大学名誉教授)